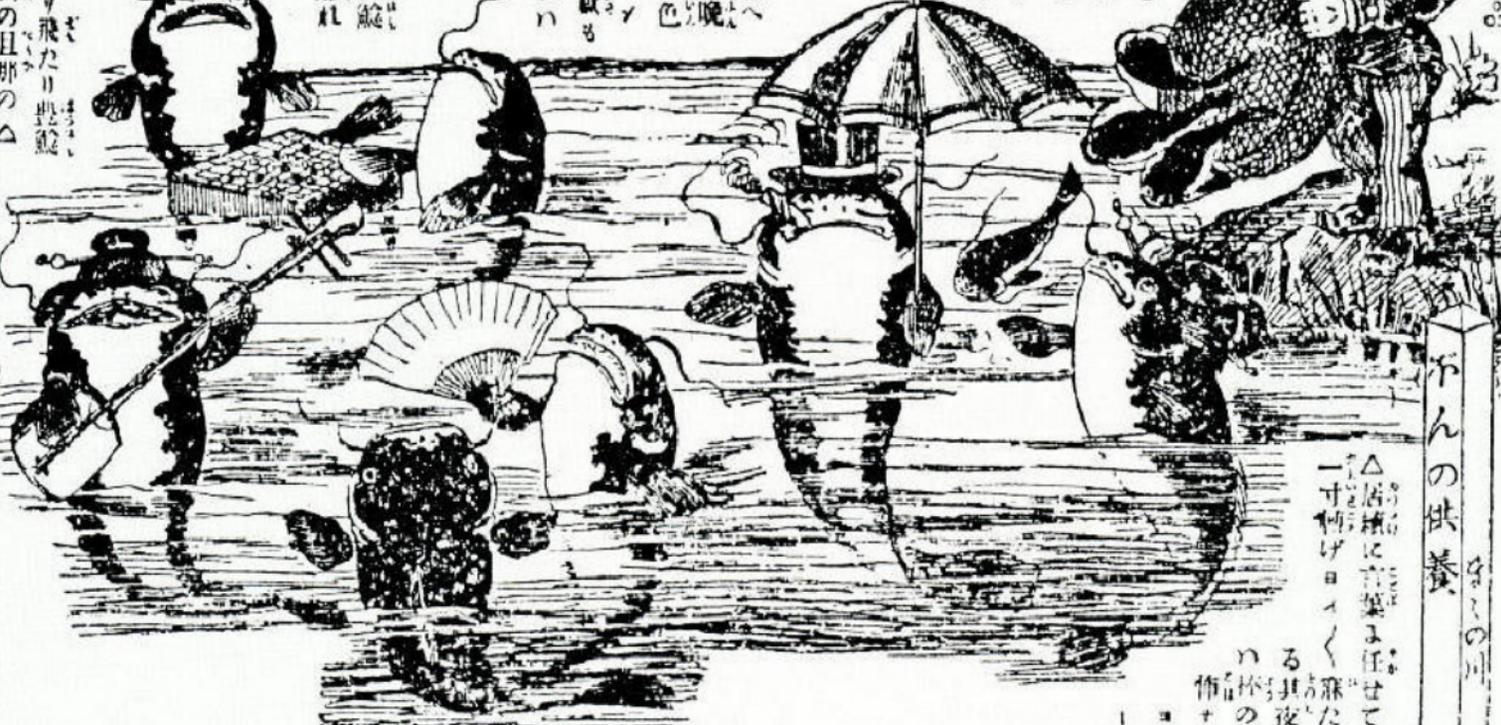




明日訓りと
宿下りの小僧
を悲しむが貴様たち
大僧だから三十日
間の休暇として徳の
川の橋の洗濯も放か
ら野樂具と猪の股や
權の供養に身と
入て遊ばまされ
なさんな

「ハ、旨しく単純
かけて日曜位でい
疑々のろめ遊べねへ
が一月と来ちやア一晚
に權と猫とて二月だ色
男より誰がならオホヤ
にまはんの鼻毛の取も
大抵いよんだが此度の
成りさとするから殿
さしてあけ様ニヤ

「ア、權殿ばかりか備前
までも末か末まで離れ
やせぬ三上持な
ら持さん持な家
本いらすに肌み
どりアアアアア
ヤセオアアアア
誠せ慰せとい
眞平權の字ノ一跳たり飛たり豊殿
しやア殿さくじや持の且那の△



△橋に言葉ま任せて
一寸柳げロイノ寐た
る其夜
の松の
作

See! How happy they look! They are enjoying their summer holidays.

安政三年大坂橋本騒動
十月廿九日

なまのり
アアめりちの天にたはげは日命と云ふは十三神人
のたふおはせりての皇天と云ふは百神のたはりの
まのりなりと云ふはたはげのちかきかんと
なりてのちかきなりてのちかきなりてのちかきなり
たふと云ふはたはげのちかきなりてのちかきなり
たふと云ふはたはげのちかきなりてのちかきなり

アア
なまのり
アアめりちの天にたはげは日命と云ふは十三神人
のたふおはせりての皇天と云ふは百神のたはりの
まのりなりと云ふはたはげのちかきかんと
なりてのちかきなりてのちかきなりてのちかきなり
たふと云ふはたはげのちかきなりてのちかきなり
たふと云ふはたはげのちかきなりてのちかきなり



待丸屋

寶通永

金持屋

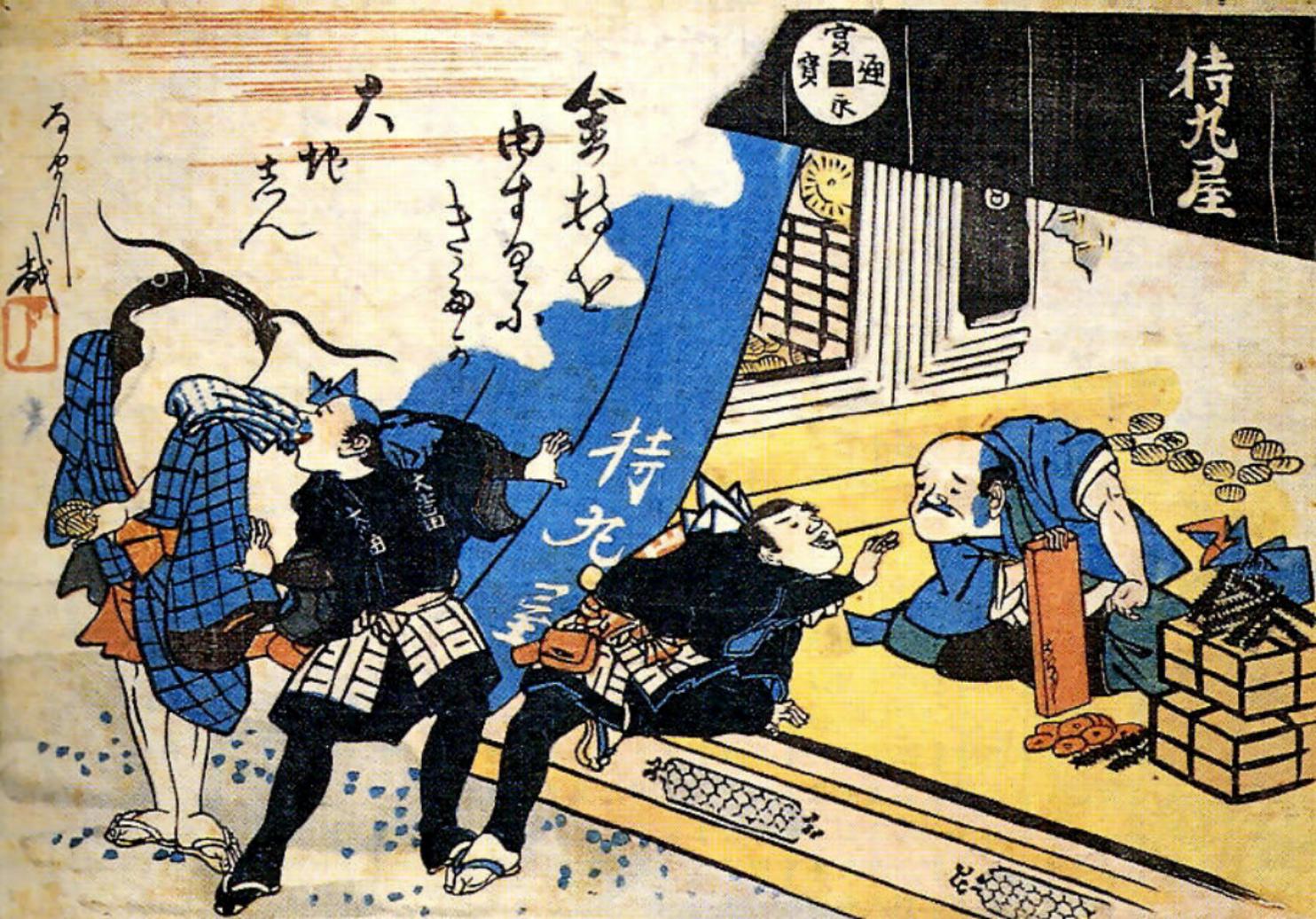
由中司

大

地
主人

待丸

有
月
裁



無事大川

おのり

とれる
ほり
り

いさ
み

なみ

さる

ま

よ
の
り
お



「ぢしん」
 下使来
 一横
 台今

一は崩の美の藤島太神の四妻想あして下とび替家とたの
 三十のケ屋とるり震動の四里四方お産をらつー御名
 さらとしくもものちの識るゆきとて日続まわり控女後宅お
 役でまんじやうー内後より全招をそなやーちこのうらわひを
 はけいさるらんぢうおてもお物お四救お屋をたたられ申うふ
 ちり世の中治まるとと震のどとー

功徳

坊徳
 懸階らんんで
 四さりまら

- 一 合のほひたふうー
- 一 巾うづうあうー
- 一 中ふやのうらわひわうー
- 一 徳蔵人のもあうー

- 一 ぬ合をやー
- 一 借金にほあうー

あはれり
 忌物

あはれり
 忌物

一用ひつての程四時をた
 腐身ふあでめちひー

一用ひつての程四時をた
 腐身ふあでめちひー



命あらずのじり巻

享和三年十月の秋、江戸の

おのろふ代んゆり如く、おのろふを

おんろふを、おんろふを、おんろふを

おんろふを、おんろふを、おんろふを

おんろふを、おんろふを、おんろふを

おんろふを、おんろふを、おんろふを

おんろふを、おんろふを、おんろふを

おんろふを、おんろふを、おんろふを

おんろふを、おんろふを、おんろふを



なんのハ
うそをつたう
あんちのり
まててやい
まててやい
まててやい

このも
いぢい
いぢい
いぢい
いぢい
いぢい

おんろふを、おんろふを、おんろふを





Vertical Japanese text columns, likely a narrative or commentary related to the scene above.



Vertical Japanese text columns on the left side of the fish scene.

Vertical Japanese text columns on the right side of the fish scene.

公卿大夫士庶
皆宜遵守
此法
庶幾
國祚
永長



此法
庶幾
國祚
永長
公卿大夫士庶
皆宜遵守
此法
庶幾
國祚
永長

「此間から天氣の具合がわる

しくと思つて居らちや

大變昨日ハ人の身今日ハ

我が身の上らちやり出で電

信いとボツラ切ると地震ど

あるか天震どおそ有りと思

ふ心のわご櫻浮世

の榮花ハ一時の夢

權と兼と夜が今さ

らに思ひ出さきて

なつらーい辰是ら

の彌年賜金が命

の綱万葉集で無つ

て満介わくく

「痛がるいどの權妻く

さいどのといけふさけ
とわいくともうぬら
ダ常にそる電柱から
引り抜て此とやりだぞ
ア、リヤ〜



○衆の轆人

彼の衆公、女の股の色の白首を靴で
 居てどまぐ、雲の根太板を踏外し
 糸頭倒し落し、云ふ、巴の落
 ろし、のを見掛けて足を洗ふと、扱
 女酒無い話、でハあるエ、飛ん、非能
 の契りて有、ヨナ



Look at the fall of the fish of the species of Namada!

鹿島要石真圖





丹波

丹波の山王祭
山王祭の山王
山王祭の山王

山王

山王祭の山王
山王祭の山王
山王祭の山王

大はぶね

ぶ

「たのしみ

おつぎの

火もやま

とんぐんゆうくすし

飯とくおやま、毎日の花

こころんごに高くあり

古物の沖まき、坊あらい

古をばたらくつみあげて

あ、木の板も虫まきして金カケ

職人、おちぎい、おきく、えり

役者のらんまき、松をまき

よ、持やぶ、深、よろらふ



地震よけの
歌

水あみ
つげよ

いのち
と

たさくろく

三分の
うちよ

くろど
らたしん



川節ふんを
たれうをえ
ふん
入め
焼



トクシ
の
ま

トクシ
の
ま
の
ま

トクシ
の
ま
の
ま

トクシ
の
ま
の
ま

安政二年十月二日夜の四時神々々天二燈のるすと御

例の大懸神念ふゆ神々々御に十里等方御

ヒヨリ御自身も志ひまのて塞てある所御中の御

ま食て御味ある御事御に御の御方御

も御も御日本の後と刀はせ御御する所御

御持出御御事御も御と御の下と御と御

たまると御振御 諸神は御の御の御は御

御川の板御御御御御御御御御御御

力身せ御山王 神田二二所の御子御我御御

御御ひけ御御御御御御御御御御御

御御とら御御御御御御御御御御御

御方御御御御御御御御御御御御

信州地震

越後地震

小田原地震

江戸地震



御の御御御御御御御御御御御御
御の御御御御御御御御御御御御

弁慶

家

持

つ

道

具



姥老ん大はるぶ
どろ化大はるぶ

下方名

金をまてる。

蘇人たのあ己

辰酒まると方

のせんがのこ

ままる。

ぬります

おくら八層小

合世八方へもえ

よりこれおはるか

尼そ作天

十方ふれまませ

る。後宅のそいそ

お老んしる。金をま

以俸老んおまのこ

大さきさ。役老己

籠ゆくほ

孫つさえん

せう世乃

をを

万景楽

水屋作



おろしんくとり
さつあざれて
さけとら
ゆき八ははるじ
耳と女三佳れ
すのこ



おろしんくとり
さつあざれて
さけとら
ゆき八ははるじ
耳と女三佳れ
すのこ



たのりんもあこ
おまもどろいせん
くろく



こつ姥老ん
おまもどろい
おまもどろい



おまもどろい
おまもどろい
おまもどろい

おまもどろい
おまもどろい
おまもどろい



待九屋

實通
實永

金持

由

大

地

ま

待九屋

石

林



安政三年十月廿二日の夜
天竺原おびとしく家くづれ

人おしく死す内ホ
あやうき命をたをかり人ハ
伊勢太神宮へのわら神

信んのごさくハ
神るは府内を
いせめぐり

これおらんしのたもとわも
あんふもあまよ
ふしきこわ

これハ
のう

おやあしぎたね
わしちみよや

おやあしぎたね
わしちみよや

人袂ホ
は毛物もく
芝神乃
ちま
志む
ありかたや

神るは府内を
いせめぐり
てきお



地震
火災

あくとるひ

アラセテ今多ク今多ク今多クの天災と神の力にて
 なるひまをう十月二日三日町並か門を保まひ
 三國一夜のそのうち不土彦や登の不復の山
 かさうれめ相坐の松丸をやう松丸を筋りまする
 諸道具とか座外おそこ野船をる力の若を
 病ひ五七の兩とありかふる毛や石の目ふ志こて
 ろもてふあめを焼糸の登夜福つてん自月昔火の
 用心や才の用心春る林と自替人の万才ととうひとめ
 かそくはしら白かれはのあてさくある人の山これ白世色一出雲
 つらま更りつる神このあまかこめつる昔系皇國千代ふ八あ代ふ要石の
 穀とありて若のむそあさうぬ津代とをかうひ又りや妙めをるまつけて
 ぬららわの舞ゆるるく尾簪と動りさへ麻島の神の名代ふ
 ひこと觸うかき入つけ高麻う糸とち紙くみもほそ川くさうりく



大命延 酒中屋



死死人人藝藝

萬帳

福帳

揚帳

状

鶴めを

ちまぬ

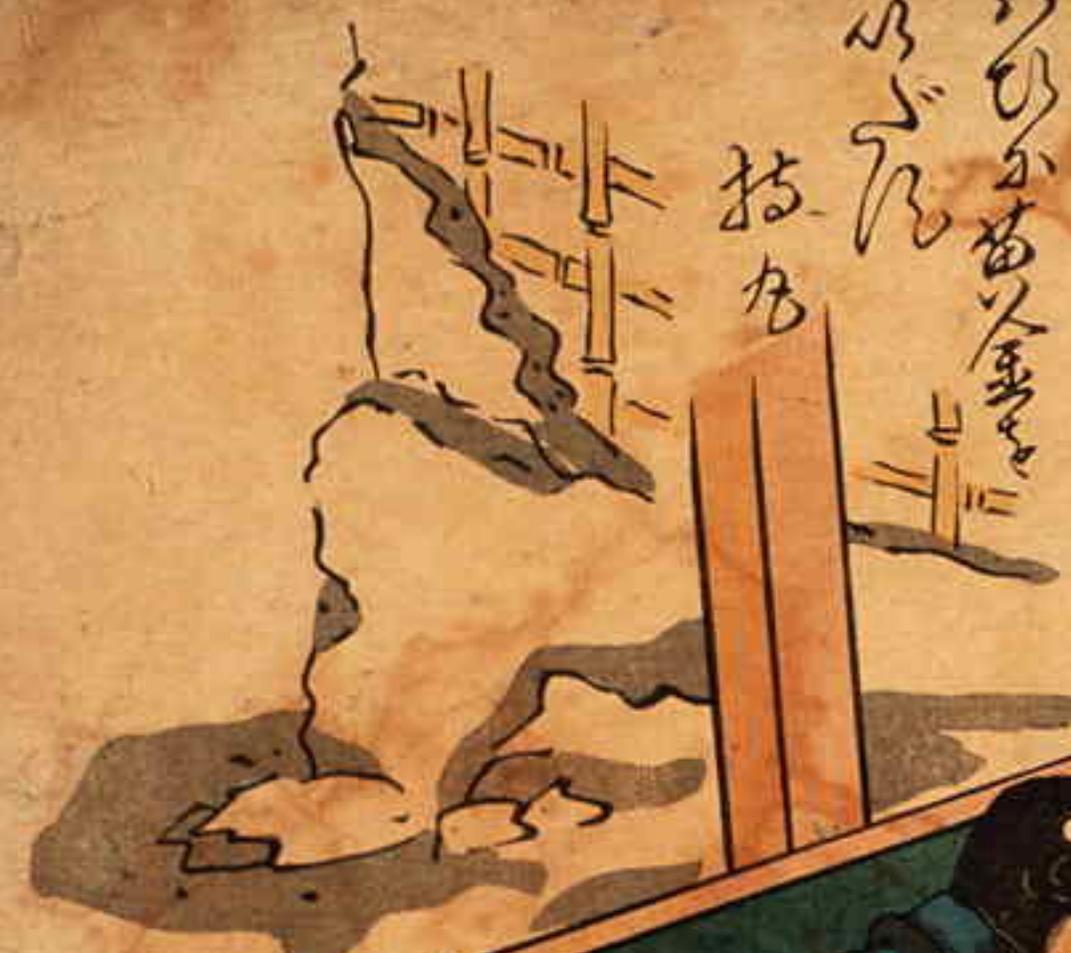
ちまぬ

ゆん

ひん

ひん

持名



諸般音聲録

地ち 震ん 訶ら 良ら 革も 天て 尚も 代よ 賀が



見突地震角力取り合ふ突

大地震	驚キ	八方徒	火ヲ出シ	一面	黒煙リ	逃道	困野	五丁町	人の山	五蔵の	皆振イ	往來	家根山	焼瓦	灰の山	鶴張	板のあ	徒家	根の	
ハツの張	松板	言根山	諸職人	勢	法藝	雜流	三芝居	二度焼	御帳裏	焚出シ	大織	頂キ	普人者	地	寺院方	大地の				



虎嶋田之殿

大島

大地震

千人百万遍



一ひたひたに八ひきりうらなひごと
 るおめ・無垢極くてびくまひ入
 さんど又夫は戸をらんりや
 いやふり家持せたり人そあま
 ははもふあんがまふまけま
 おあつと法個かいあまも
 とあつと又いせつ金もあけの
 人けさあなまつていあいの
 なあまもあまもあまの
 こめためらあ言ぶんだ
 志てらたされとゆあ
 らいんあま
 事七河路橋佛
 ことあすい



焼

あまのり

職人の

めを

えい

口と

町に火をえようかせられめいらく
 玉焼をいすかきしんかえ打角せ
 焼はよ府大進とらも内おむめ
 右間由瓦せろ、四月かき程
 一夜みく、病多のあげまい
 一う親き彼やま
 一骨焼をせろ
 一うまの日本茶

松方、ええ工所

十月二日ゆきぬめりやが

高田、えい、ひまふね

江前
 かきあまのり
 鮎大火場焼





玉冠地新巻
桶伏の後

火夜者問並



お目も憐れなるお打めは地震の
見え火のいきおひなる子お

迷ふ影おどおおらるるお

さこいおおまの抱女所よらるるお

こゑかり船ぬこおこいぬお

もあし申お言家の天あへ

どうもくづくひといらぬの風

のかこいぬおこいぬおあけ

くのえてのあつちかぬの

かさつおひをまのつこがうりてお

おろの「あけおせおある身そつらわ
ちんきおあろくかこいぬお



鶏
高天原





